

第61号

発行日：平成24年6月16日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：病院長就任にあたって
弘前大学に感謝を込めて
- 2面：医学研究科長・医学部長寄稿
- 3面：寄附講座 糖鎖医化学講座
地域健康増進学講座
- 4面：解剖体慰霊祭
- 5面：AO及び前期日程入試を振り返って
- 6面：国際化教育奨励賞を受賞して
- 7面：研究室紹介 分子生体防御学講座
- 8面：人事異動

題字 前弘前大学長 遠藤正彦氏筆

病院長就任にあたって

弘前大学医学部附属病院長 藤 哲



今回の医学部ウォーカーへの寄稿は、前職の整形外科科学講座教授に就任した二〇〇二年以来ですので、実に十年ぶりということになります。

さて、弘前大学医学部附属病院は、専任の病院長として六年にわたりご尽力された花田勝美前病院長の統率のもと、職種を越えた医療スタッフならびに事務方の働きにより、第一期中期目標・中期計画はほぼ達成されました。また、附属病院の再開発事業もほぼ終了し、病院外観は一新されました。しかし、この開発事業は昭和六十三年十二月に竣工した第一病棟に始まり、十四年間経過した建物で改修を待っていることも事実です。現在は、平成二十二年から始まった第二期中期目標・中期計画の三年目に入り、残された事業は集中治療室ICU・新生児集中治療室NICU・発育支援室GCUの充実計画の遂行です。

今後、附属病院が留意すべき課題は、急性期病院としての機能をはたすべき地域連携の充実、特定機能病院として先進医療の拡大、

県内唯一の総合的教育機関としての初期研修医・後期研修医の増加、独立行政法人を支えるべく病院経営の健全化などがあげられます。

新聞などでご存じかも知れませんが、青森県地域卒業生生の増加に伴い、初期研修医・後期研修医の増加が見込まれます。特に後期研修における卒業生の帰学率は、最低であった平成二十年の二一九％から漸増し本年は四二・四％と研修制度が始まって以来の普及した手技ですが、東北

最高値となりました。卒後臨床研修制度が始まる前の状態に近づくことを期待していますが、国内外からの若手医師がここで研修したいと考えるような教育機関を、医学研究科と共に構築することが重要です。

／北海道地区ではここ弘前大学医学部附属病院が初めてとなります。さらに本年度より、医師・看護師等の各種治療手技の習得あるいは再教育を目的としたスキルアップトレーニングセンターを設置しました。タミーあるいはヴァーチャル画像を応用した内視鏡手術体験、心臓カテーテルトレーニング、マイクロサージャリー手技習得などが可能となっています。

病院経営の健全化のためには全職員の皆さんの頑張りに期待するところ大です。その為には、職員の皆さんに待遇改善を含めた働きやすい環境を提供するのが、病院長の最大の役目と考えております。

長年、柔道一直線だった私は、指導者になってしばらくは理想と現実のギャップを感じる日々を送っていました。そのような時、二十年来、研究面でお世話になり、また大学院の同級生である梅田孝先生も在職する社会医学講座の中路重之教授から「古賀君も大学の教員、指導者になったからには、そろそろ本格的に研究（勉強）した方が良くないか。」というお話を頂きました。また、この時、まさにこれが今の自分に課せられた新たなチャレンジの場であると感じ、「学び」の世界に弘前大学に飛び込む決意をしました。また、その後四年間を過ごすなかで厳しくも情熱いっぱいのご指導して頂いた先生方や、様々な面でサポートをしてくれた多くの仲間たちとの「学び」の間が、いつしか私にとって「チーム弘前」となり家族の様な大切な場所に変わっていききました。

今回、提出した学位論文のテーマは「Influence of a 3-month training program on muscular damage and neutrophil function in male university freshman judoists（大学新入学柔道選手における三カ月間のトレーニングが筋組織及び好中球機能に与える影響）」（英文誌 Jumnescence に受理、二〇一二年度に掲載予定）です。この研究は、大学新入学が生活や練習環境の変化により入学から数か月間、体調不良を訴え、満足に競技もできず、選手によってはそのまま引退させしてしまうという、いわゆる「五月病」発症の原因を免疫機能（好中球機能）を中心に検証したものです。その結果、長期間トレーニングを休んでいた（ふつう半年ぐらい）新入学生に対して急激に高強度、長時間の運動を負荷した場合、好中球機能の低下が観察され、この原因として、この時期の筋組織や免疫機能がこれらの運動負荷に適切でいる能力を獲得していないことが示唆されました。よって、これまでどちらかと言えば精神的なものとしてとらえられていた五月病に、免疫能に代表される身体的疲労が深く関与している可能性が示唆されました。

最後に私の座右の銘をお贈りします。

弘前大学に感謝を込めて

弘前大学大学院医学研究科修了生 古賀 稔彦



四十四歳の私にとって弘前大学で学んだ四年間は、人生において「学び」の大切さを教えて頂いた貴重な時間、大きな財産となりました。指導者「古賀稔彦」としての道を選んだ私は、教え

子たちに対し百人それぞれに合った正しい指導をしたい。そして、世界で戦える選手作り、社会に求められる人間を育成することが私の夢であり、これが私が目指す理想の指導者像でした。しかし、指導者となりしばらくして、私が理想的な指導者になるためには、今の自分が持つ限られた知識や経験だけではあまりに

も少な過ぎるという現実にぶつかりました。また、この時、私自身は意外にもこれを冷静かつ素直に受け止めて、「教え子だけには努力はさせない」、「人を育てる自分自身が教え子以上に努力することが必要だ」という気持ちで湧き上がってきたことを今でも覚えています。指導者となったからには、主役は教え子であり、私の役目は、その主役である教え子たちを大きく羽ばたかせることであり、指導者としての夢を実現し、そして理想的な指導者に近づくために「学び」の世界に飛び込みました。

一方、この四年間での一番の思い出は、やはり三名の先生方（審査員）の前で研究内容を発表し、質疑応答を受けた最終学位審査であったと思います。私もオリンピックをはじめとする数々の国際大会あるいは講演などを数多く経験してはいましたが、それまでとは全く違う緊張が審査前から終わるまで続きました。特に審査当日の数十分前には緊張がピークに達し、何故か柔道の試合前に緊張を解きほぐすために行っていた「内緒のおまじない」（内容は秘密です）を知らず知らずのうちにやっていました。この最終審査を含め大学院の四年間は、社会医学講座の先生方と関係者に教

え、支えていただきましたが、慣れない環境の中でも良い緊張感、良い「学び」が経験できたと感じています。

今回、提出した学位論文のテーマは「Influence of a 3-month training program on muscular damage and neutrophil function in male university freshman judoists（大学新入学柔道選手における三カ月間のトレーニングが筋組織及び好中球機能に与える影響）」（英文誌 Jumnescence に受理、二〇一二年度に掲載予定）です。この研究は、大学新入学が生活や練習環境の変化により入学から数か月間、体調不良を訴え、満足に競技もできず、選手によってはそのまま引退させってしまうという、いわゆる「五月病」発症の原因を免疫機能（好中球機能）を中心に検証したものです。その結果、長期間トレーニングを休んでいた（ふつう半年ぐらい）新入学生に対して急激に高強度、長時間の運動を負荷した場合、好中球機能の低下が観察され、この原因として、この時期の筋組織や免疫機能がこれらの運動負荷に適切でいる能力を獲得していないことが示唆されました。よって、これまでどちらかと言えば精神的なものとしてとらえられていた五月病に、免疫能に代表される身体的疲労が深く関与している可能性が示唆されました。

最後に私の座右の銘をお贈りします。

人は「一生精進」、「常に前進」です。

（前ページより）
施行し、社会人入学を推奨してきましたが、平成十八年度からは中国医科大学と連携して、毎年一名を基礎講座に受け入れてきました。入学金に加え、三年分の授業料と生活費を支給しています。既に四名が修了し現在二名が在籍しています。平成二十年からは指導教授が許可した場合は臨床研修二年目からの大学院入学も可能にしました。

大学院の入学定員は平成十八年度までは六十四名でしたが、平成十九年から五十五名になり、平成

二十一年からは五十名に削減しました。したがって、現在の大学院の収容定員は、一年～四年生が各五十名です。平成二十年には卒業後に本学あるいは青森県に残ってくれる学生を増やす努力を行ってきました。平成二十七年からは青森県定着枠の学生が六十名ずつ卒業することになります。より多くの卒業生を本学に残すことが大学院の活性化に繋がり、さらに青森県の医療のレベルを上げることにもなります。今後ともご協力のほど、どうぞ宜しくお願いいたします。

真栄城優夫先生によるFD講演会

学務委員長 若林孝一
（脳神経病理学講座 教授）

真栄城優夫（まえしろまさお）先生によるFD講演会が学務委員会と卒後臨床研修センターの共催で平成二十四年四月二十七日の午後六時から開催されました。今回の講演会は袴田健一教授（消化器外科科学講座）のご尽力により実現したものです。会場となった臨床大講堂には教員に加え、研修医、学生の姿も見えました。



これ、平成二年から六年間は沖縄県立中部病院長を務められました。元ハワイ大学卒後臨床研修プログラムディレクター、外科教授であり、厚生労働省の審議会委員（医師国家試験、臨床研修など）や日本医療評価機構特別審査員のご経験もある先生です。本学の袴田教授、加藤博之教授（総合

医学部の入試改革も進められています。医学部の入学定員を百二十五名に増やし、AO入試や青森県定着枠の新設などにより、卒業後に本学あるいは青森県に残ってくれる学生を増やす努力を行ってきました。平成二十七年からは青森県定着枠の学生が六十名ずつ卒業することになります。より多くの卒業生を本学に残すことが大学院の活性化に繋がり、さらに青森県の医療のレベルを上げることにもなります。今後ともご協力のほど、どうぞ宜しくお願いいたします。

寄附講座

糖鎖医化学講座の設置

糖鎖医化学講座 特任教授 遠藤正彦

平成二十四年四月一日付で、大学院医学研究科内に寄附講座・糖鎖医化学講座が設置されました。これは、サンスター株式会社との提供によるものです。サンスター株式会社は、三年前同じく医学研究科内に寄附講座として糖鎖医学講座を提供されており、本年三月三十一日期限により終了したものを、内容を一新し、糖鎖医化学講座として改めて提供いただいたものです。



医学教育学講座）もお若い頃、真栄城先生の薫陶を受けたとお聞きました。今回は「我が国における卒後臨床研修とこれからの課題」というテーマでの講演でした。初めに、ご自身の国内、国外での体験をもとに、日本を含む各国における急性期医療の実態、米国やアジアの大学での医学教育、臨床研修システムについて紹介されました。さらに、医学生や研修医を育てるためにはプロフェッショナルリズムの教育が必要であること、そのためには教員と研修医、学生が一緒に becoming 患者の治療にあたること、医学知識だけでなく患者が抱えるすべての問題を解決する能力を学生のうちから養うこと、コミュニケーション技術の重

要性を力説されました。また、全国の医学部で実施されている共用試験（CBT）には到達目標が明示されておらず、医師国家試験が何度でも受験できることを例にあげられ、日本の医学教育には厳しさが必要と

新設等、また、本学コラボ弘大内にある弘前大学発ベンチャーとしての、弘星テクノ株式会社に出資し、役員及びスタッフの派遣等も行っており、本学との産学官連携を強力に進めているところとあります。本学でも現に、国立大学法人の中期目標に、糖鎖工学を機能別強化における研究の一つの柱に据えております。医学研究科の中で

これに対応するものとして、附属高度先進医学研究センターに糖鎖工学講座が設置されており、これと連携する形で寄附講座・糖鎖医化学講座が設置されたこととなります。

糖鎖医化学講座のスタッフは、特任教授一名、糖鎖工学講座教員三名が併任され、技術補佐員と事務補佐員各一名により構成されております。したがって、糖鎖医化学講座は、糖鎖工学講座と連合講座の形をとり、教育・研究が展開されております。

研究の内容は、糖鎖工学講座の伝統的研究テーマであるプロテオグリカンの糖鎖工学的研究に連動して、プロテオグリカンの糖鎖工学の臨床応用に主力が向けられています。

プロテオグリカンに関しては、糖鎖工学講座から発したサケ鼻軟骨のプロテオグリカンが文部科学省都市エリア産学官連携促進事業の中で発展し、現在では青森県知事の「あおもりウェルネスランド構想」事業の中で、企業化・製品化が進んでいるところで、本学の糖鎖工学講座と糖鎖医化学講座は、県の事業をプロテオグリカンの基礎的研究により支援していくこととなります。

糖鎖工学は、現在次世代のバイオテクノロジーと目



されていますが、高分子のタンパク質や核酸とは異なって、更に大きな分子であると共に、その構造の複雑さはタンパク質・核酸の比ではなく、この領域の発展のために解決すべき難問

寄附講座

弘前市の寄附講座「地域健康増進学講座」の開設に当たって

地域健康増進学講座 教授 中路重之



青森県の短命に取り組んできた当社会医学講座は、以前から「この地味で、世間の耳目を集めるににくい分野で、根の張った仕事を、着実にことを進めることこそが重要である」という認識を持ち、ことあるごとに訴えてきました。

この訴えの甲斐あって、ついには市長が英断を下しました。全国に類例のない寄附講座「地域健康増進学講座」（Department of Community Health Promotion）が創設されたのです。専任教員（助教）として、岩根かほり助手が社会医学講座から移りました。社会医学講座の中路、梅田孝准教授、高橋一平講師が併任します。

本講座の主な仕事は以下の二つになります。
1. 弘前市における「健康づくり」を軸とした地

域保健活動を推進するための、教育、研究、社会活動を行う。
2. そのうち社会活動は、一般市民を対象に、生活習慣病の予防、改善策や健康の維持、増進策に関わる知識を啓発、普及するとともに、これに関わる具体的な方法や行動を助言、指導する。さらに、これに関わる社会的基盤の整備と地域システムの構築を目指す。

（次ページへ続く）

（前ページより）

具体的な取り組みとして「地域リーダー育成事業」があります。すなわち、毎年二十名程度の市民を選抜し、皆さんに健康に関する知識（実践も含む）を学んでいただくことで、いずれは地域の健康リーダーとして活躍願おうという取り組みです。実践の場（フィールド）としては、「岩木健康増進プロジェクト」及び「ヒロダイいきいき元氣塾」を考えています。

「えっ、どこにでもありそうな普通の市民向け講座じゃないの？」といぶかる向きもあるでしょう。違います。私たちは、ここに参加していただいた方を、講座のメンバーと同じような気持ちで、育て、接し、その関係を研修終了後も保つていこうと考えているのです。社会医学の活動にはこのような人間関係が何よりも大切だと考えているからです。

「一方面的な社会貢献では、カウンターパートが育たないのでは」とお考えかもしれません。本取り組みは違います。市のスタッフ、あるいは多方面の関係者とともに汗を流しながら、この取り組みを継続発展させていこうと考えています。

人は病気には興味がありますが、健康には興味がありません。我々、保健予防分野の人間が必ずぶつかる大きな壁です。加えて、現代社会は社会力の劣化が進んでいます。町内会や婦人会の組織が縮小し、民生委員の人材も欠乏しています。同じ方がいくつもの役職を受け持っているという現状です。このようなときにこそ、社会力を育成して

テニユアトラック教員の採用

医学研究科長 中路重之

優れた研究成果を上げた研究者の多くは、若い時期に、その成果の基礎となる研究を行っています。

た。さらに、平成二十三年からは、モデル事業の成果等を踏まえて、「テニユアトラック普及・定着事業」が始まりました。

第四期科学技術基本計画（平成二十三年八月閣議決定）においても、次のような数値目標が定められています。

「国は、テニユアトラックの普及、定着を進める大学への支援を充実する。これにより、各大学が、その目的や特性に応じて、テニユアトラックの導入を進めることにより、テニユアトラック制の教員の割合を、全大学の自然科学系の若手新規採用教員総数の三割相当とすることを目指す。」

このテニユアトラック制とは、次のような制度です。

1. 公正で透明性の高い選考により採用された若手研究者が、審査を経てより安定的な職を得る前に、任期付の雇用形態で自立した研究者として経験を積むことができる仕組み。

このようにすることで、文部科学省では、平成十八年度から、アメリカ等で定着しているテニユアトラック制を大学等へ導入するモデル事業を進めてきました。

この結果、平成二十二年度までに四十大学等がテニユアトラック制を導入しました。

いくという草の根的な活動は大切です。本寄附講座がその先駆けになればと願っております。

皆様のご理解と温かいご協力をお願いいたします。

③公募を実施し、公正・透明な選考方法を採用

ていること。

④研究主宰者として、自立して研究活動に専念できる環境（例…研究資金の措置、研究支援体制の充実、研究スペースの確保、研究活動時間が全仕事時間の七〇%であること）が整備されていること。

⑤任期終了後のテニユアポスト（安定的な職）が用意されていること。

平成二十三年度に文部科学省のテニユアトラック普及・定着事業に本研究科の事業計画が採択されました。現在までそしてこれから、以下の三名の教員を採用することになります。

1. 二十三年度…神経科学領域 二十四年三月一日付で助教として二階堂義和先生を採用

2. 二十四年度…移植医学領域 二十四年四月一日付で助教として飛澤悠葵先生を採用

3. 二十五年年度…領域未定 二十五年四月一日付で助教を一名採用予定

なお、医学研究科におけるテニユアトラック制度は以下のようになっています。五年間の任期付き助教として採用し、スタートアップに要する研究費として初年度は一、〇〇〇万円、二年目はその半額の五〇〇万円上限に文部科学省からの補助があり、三年目以降は自ら外部資金を獲得するということになりました。

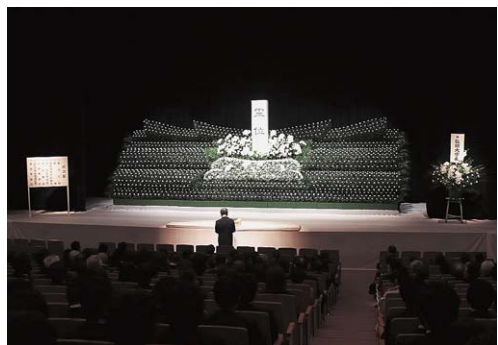
任期は原則五年ですが、採用二年後に中間評価を行い、それを経て五年目（最終年度）にこれまでの研究実績などによりテニユア審査を行います。テニユア

アとして適格であると認められた場合は、医学研究科において助教又は准教授として採用することになります。

テニユアトラック教員の採用は、医学研究科の教員定員から融通しなくてはならず、それなりに厳しいものです。しかし、これらの先生方が新しい研究で成果を出すことで医学研究科の業績が上がることは有意義なことです。そのような目で、温かく見守ってください。よろしく願います。

平成24年度 解剖体慰霊祭

生体構造医科学講座 教授 下田 浩



弘前大学医学部ならびに附属病院においてご遺体を解剖に捧げられました百七十七柱の御霊に弔意を捧げるため、平成二十四年度弘前大学医学部解剖体慰霊祭が五月十一日午後一時三十分より弘前市文化センター一階大ホールで挙行されました。慰霊祭にはご遺族、白菊会会員の方々にご臨席賜り、また佐藤敬学長はじめ各方面から多くのご来賓をお迎えし、医学部医学科、保健学科の教職員および学生が参列してしめやかに執り行われました。式に先立ち、献体いただきました方々に対し弘前大学医学部創立五十周年記念アンサンブルおよび弘前大学医学部管弦楽団による慰霊の曲が演奏され、荘厳な空気に包まれました。全員による黙祷を行い、ご冥福をお祈りした後、昨年から本年の慰霊祭までに医学の教育と発展のために献体されました方々のご芳名が一人一人奉読されました。中路重之医学部長より祭詞が述べられましたのに続いて、学生代表（医学科三年生、矢野直志さん）が感謝の意のこもった弔辞を捧げました。その後、医学部長、藤哲附属病院長、對馬均保健学科長、佐藤敬学長、医学科三年生久保田実怜さん、保健学科三年生葛西貴徹さん、奥田 稔白菊会理事長による代表献花が行われ、附属病院長より御礼の言葉が述べられました。

続いて、参列者全員が献花を行い、式は滞りなく終了いたしました。

慰霊祭終了後、ご遺族、白菊会会員の方々、医学部教職員は弘前市墓地霊園にある医学部納骨・埋骨施設に参拝し、献体者名簿を納めました。そして、全員で黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りいたしました。

「解剖学」はご承知のとおり、全ての医学の基



盤であり、医学徒がその道を歩むには避けて通れないものです。その教育の中心となるのが人体解剖学実習

であり、近年の科学技術の進歩によりいかに優れた医学教材が開発されようとも



実際のご遺体に勝るものは決してありません。医学生はご遺体から解剖学の知識だけでなく、こころの形成を含めてきわめて多くのことを学びます。このような解剖学実習は白菊会の皆様の崇高なご意志とご遺族の皆様のご理解と多大なご協力に支えられております。改めて、生体構造医科学講座を代表しまして心より厚く御礼申し上げます。

しかし残念ながら、本学医学科の解剖学実習は現在医学部の定員増、教育カリキュラムの変更等の影響もあり、十分な解剖体の確保が困難な状況にあります。紙面をお借りいたしましたので、教職員の皆様にはご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

コラム 医学部 こぼれ話

吉本の漫才師が高額の収入がありながら、親や姉が生活保護をもらっていた問題がテレビを賑わしている。確かに、アルバイトをやっているより、生活保護を受けた方が身入りが多い場合もあり、さらに医療費もただなので、働くよりいいという。毎年三兆円だそう

だ。我々の時代は卒業し

てすぐに大学院に入り、基礎の大学院に行くと収入がほとんどない場合もあった。今の方は信じられないかもしれないが、結婚して子供が二人いた先輩は、大学院の時に生活が苦しくて、市役所に生活保護を受けられないか真剣に聞きにいったそう

平成24年度

AO及び前期日程入試を振り返って

医学科入試専門委員長 鬼 島 宏
(病理生命科学講座 教授)

この冬は記録的な寒波が続き、四月まで弘前市内に雪が残りました。それでも四月三日に挙行された入学式の後、大学内はすっかり春の雰囲気となりました。昨年六月の二年次後期学士編入学第一次選抜試験に始まりました平成二十四年度入試に関して、お忙しい中、試験監督や面接委員、出題委員、採点委員をしていただいた先生方および学務担当をはじめとした

事務職員の方々に改めてお礼を申し上げます。

本学医学科においては前期日程の志願者倍率がこのところ高倍率を維持して来ましたが、平成二十四年度は昨年に比べさらに五十四名増え、八百五十四名の志願者があり、志願者倍率が十三・二倍と昨年以上の難関となりました(表1)。

そのため、昨年に引き続き医学科内の講義室等では全受験生を収容できなかった

り、弘前高等学校のご厚意により、同高等学校に試験会場を変更しました。これはうれしい悲鳴といえましょう。

実施四年目となるAO入試は、第一次選抜を平成二十三年十月一日・二日に行いました。「模擬講義に関する筆記試験」「個人面接」による評価を行い、受験者百二名から八十名を合格者とししました。第二次選抜は十一月六日に「ケーススタディの自学自習」「ワークシヨップ」による評価を行い、大学入試センター試験の結果(資格試験)を待つて、最終的に四十名の合格者を決定しました。

青森県が三十三名(昨年度と同様)、北海道が一名、岩手県と秋田県がそれぞれ三名という結果でした。一方、前期日程の「青森県定

着枠」は、定員十五名のところ百四十九名の志願者となり、今年も全体の倍率に連動した高い志願倍率となりました。

入学者の出身地域をみると(表2)、今年は青森県出身者が四十一名と昨年度よりも一名増加し、ここ数年は四十名以上を維持しています。青森県出身入学者のうち三十三名がAO入試ですが、その他にも五名が前期日程(定着枠)、三名が前期日程(一般枠)と健闘しました。青森県に次ぐのは、東京都十六名、茨城県、埼玉県各五名、北海道、秋田県、宮城県、栃木県、新潟県各四名となりました。出身高等学校では、弘前高等学校が十二名、青森高等学校、八戸高等学校が各十一名と続き、引き続き弘前・青森・八戸の三校

の強さが発揮されました。一方、高等学校卒業後の期間に関しては、若干現役入学者が増えましたが、昨年度とほぼ同様でした(表3)。また、女子が四十名となり、昨年度より八名増加しました。

一昨年度から学士編入学が三年次から二年次後期になったために、選抜試験も新年度早々に開始され、六月三日に第一次選抜試験が行われます。最後に平成二十四・五年度の入学選抜試験の予定を表4としてお知らせいたします。年を追う毎に教員あたりの仕事量が増加していますが、入試業務は弘前大学の教員として根幹をなす仕事ですので、今年度も先生方のご協力をよろしくお願い申し上げます。

まず、第百六回医師国家試験結果について報告します。弘前大学の医師国家試験合格率は新卒九四・八%(九二・九七)、全体九二・二%(九三・一〇二)で、国公立全体の平均合格率(新卒九四・三%(三八五四・四〇八七)、全体九〇・五%(七〇九三・四五二五))と比べて若干上回る数値でした。合格された皆さんに心からの祝意を表します。

卒業生の地域別研修先(付表参照)は、青森県内が三十六名(三七・一%)で、過去数年間の推移は、三十五名(H19)、三十四名(H20)、四十名(H21)、三十一名(H22)と、ほぼ横ばいの傾向ですが、本年度初めて青森県定着枠十八名の卒業があり、今後は増加が見込まれています。一方、北海道・東北(青森を除く)は二十六名(二八・八%)、関東圏が十八名(二八・六%)、中部以西が十一名(一一・四%)でした。

青森県内のうち初年度に弘前大学医学部附属病院で研修する卒業生は、H21年が十三名、H22年が十一名、H23年が七名であったのに対し、今年は十名で定員の四十三名に対して少ない状況が続いていることには変わりはありません。本学では地域医療と連携する

卒業生進路状況

副学務委員長 袴 田 健 一
(消化器外科学講座 教授)

カリキュラムの導入など、様々な工夫が行われています。たすき掛けの地域医療機関では common disease や救急疾患診療の研修を広く積み、大学では common disease のより高度な診療をじっくりと学ぶといった研究も可能となっています。附属病院内での初期研修医の層の増加を期待したいと思います。最後に、学内外および県内外の研修医を問わず、すべての卒業生に対してはなむけの一言。医師としてのスタートおめでとう。しかし、初期研修はあくまで初期研修であって、その後医師としての力量を決定再認識して

ほしいと思います。「さすらいのローテーター」や「根なし草」とならないよう、じっくりと腰を据える場所を早く見つけて、病める人々に適切な医療を提供できる独立した一人前の医療者になっていただきたいと思っています。また、基礎医学に進む方は、よき師に出会って素晴らしい研究をしてほしいと願っています。その意味で、母校は大いなる選択肢となりうると考えます。

表1. 志願者倍率(カッコ内は受験者倍率)

年度	推薦入試	AO入試	前期日程	後期日程	計
20	3.45 (3.45)	—	8.34 (7.18)	—	6.17 (5.52)
21	—	2.25 (2.25)	8.53 (7.22)	—	6.02 (5.22)
22	—	2.55 (2.55)	8.31 (7.08)	—	6.11 (5.32)
23	—	2.20 (2.20)	12.31 (11.21)	—	8.46 (7.78)
24	—	2.70 (2.70)	13.20 (11.53)	—	9.20 (8.17)

募集人員：平成20年度は臨時定員増10名があったため、推薦入試40名(うち青森県内枠30名)となった。平成21年度は推薦入試を廃止し、その定員をAO入試に移行し、すべて地域枠とした。また、新たな定員増10名は前期日程に青森県定着枠として設定した。この結果前期日程は60名となった。平成22年度は、さらに5名の定員増が認められたため、前期日程青森県定着枠に組み入れた。この結果前期日程は65名(青森県定着枠15名、一般枠50名)となった。

表2. 地域別入学者数

年度	青森県	東北5県	北海道	その他	計
20	39 (27/12)	13 (9/4)	5 (4/1)	33 (28/5)	90 (68/22)
21	42 (22/20)	12 (9/3)	8 (5/3)	38 (27/11)	100 (63/37)
22	46 (30/16)	14 (10/4)	5 (4/1)	40 (32/8)	105 (76/29)
23	40 (21/19)	13 (9/4)	5 (3/2)	47 (38/9)	105 (71/34)
24	41 (25/16)	12 (7/5)	4 (2/2)	48 (29/19)	105 (63/42)

カッコ内は男女比

表3. 高校卒業後の期間別入学者数

年度	現役	1年	2年	3年以上	その他
20	50 (33/17)	16 (14/2)	5 (4/1)	18 (16/2)	1 (1/0)
21	41 (21/20)	26 (18/8)	19 (13/6)	14 (11/3)	0
22	48 (30/18)	24 (19/5)	14 (13/1)	19 (14/5)	0
23	49 (30/19)	25 (19/6)	15 (9/6)	16 (13/3)	0
24	56 (34/22)	25 (14/11)	10 (6/4)	12 (7/5)	2 (2/0)

カッコ内は男女比

表4. 平成24・25年度入試選抜試験日程

24年 6月 3日(日)	二年次後期学士編入学第一次選抜(学力試験)
24年 6月30日(土) 7月 1日(日)	二年次後期学士編入学第二次選抜(学力試験、個人面接)
24年10月 6日(土) 10月 7日(日)	AO入試第一次選抜(模擬講義試験、個人面接)
24年11月 4日(日)	AO入試第二次選抜(ケーススタディの自学自習、ワークシヨップによる評価)
25年 1月19日(土) 1月20日(日)	大学入試センター試験
25年 2月25日(月) 2月26日(火)	前期日程選抜(学力試験) 前期日程選抜(集団面接、青森県定着枠個人面接)

青森県内のうち初年度に弘前大学医学部附属病院で研修する卒業生は、H21年が十三名、H22年が十一名、H23年が七名であったのに対し、今年は十名で定員の四十三名に対して少ない状況が続いていることには変わりはありません。本学では地域医療と連携する

再認識して

H19～H23年度 卒業生進路状況

	H19年度		H20年度		H21年度		H22年度		H23年度	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
青森県	35	34.3%	34	33.7%	40	41.2%	31	34.4%	36	37.1%
北海道	8	7.8%	10	9.9%	6	6.2%	8	8.9%	8	8.2%
青森県以外の東北地方	13	12.7%	15	14.9%	14	14.4%	10	11.1%	18	18.6%
関東地方	11	10.8%	15	14.9%	14	14.4%	21	23.3%	12	12.4%
東京	6	5.9%	9	8.9%	11	11.3%	9	10.0%	6	6.2%
中部	11	10.8%	9	8.9%	2	2.1%	4	4.4%	6	6.2%
近畿以西	10	9.8%	4	4.0%	5	5.2%	5	5.6%	5	5.2%
不合格・その他	8	7.8%	5	5.0%	5	5.2%	2	2.2%	6	6.2%
合計	102	100.0%	101	100.0%	97	100.0%	90	100.0%	97	100.0%
国家試験合格者	101	99.0%	98	97.0%	92	94.8%	88	97.8%	92	94.8%

国際化教育奨励賞を受賞して

消化器外科学講座 助教 石戸 圭之輔

この度は栄誉ある弘前大学国際化教育奨励賞を頂き誠にありがとうございます。選考委員の先生方に心より感謝申し上げます。

現在の医学はさまざまな研究の発展に伴い細分化が進み、各分野において極めて詳細な病態が明らかとなり、画期的な治療法等の開発も我々の想像を超える速度で進んでおります。それに伴い医学教育の見直しというものが再認識されるようになってきました。今回は、国際化教育奨励賞を受賞しハワイ大学医学部で行われている医学教育を視察する機会をいただきました。違いに関してご紹介いたします。

ハワイ大学で行われている医学教育は Problem Based Learning (PBL) という言われる教育スタイルに基づいて行われており、日本での医学教育は大講義室に百人程度の医学部学生が集まり、教授の



講義を聞きながら勉強するというものが一般的です。しかし、ハワイ大学医学部では四人から五人の学生がチームを作り、チューターと呼ばれる先生を中心として臨床的な問題を解決してきます。予め用意された臨床問題から勉強するべき内容を自分たちで抽出し、解決していきながら医学的な知識をつけていくというものです。例えば、糖尿病の患者さんが、慢性腎不全の状態に陥り、透析の導入を考えていかなければならぬというような臨床症例が用意されております。この症例から、学生達は学ぶべきことを自分達から抽出していきます。生化学的な糖代謝メカニズム、糖尿病が引き起こす合併症の病態、糖尿病患者の外来治療マネージメント等、一つの臨床症例から広い分野の医学知識を学んでいきます。この過程でチューターが非常に重要な役割を持ちます。学生達の学びたい、知りたいという欲求を上手にコントロールしながら学ぶべき課題に誘導していきます。まさに、オーケストラの指揮者のような存在でした。彼らは、学ぶべき課題を分担して勉強し知識をグループで共有していきます。基礎医学と臨床医学のコラボレーションがあまりに見事で、声にならなかったことが忘れられません。視察の中で、ハワイ大学医学部の学生と触れ合う機会があり

ました。その中で、PBL というスタイルに関してインタビューしてみましたが、彼らは勉強することが楽しいと口をそろえて話していました。今の日本の医学部生は、講義と試験に追われ勉強することが楽しいと感じる余裕は全くな



いのではないのでしょうか。弘前大学医学部では総合医学教育学講座の加藤教授のもとで、PBLスタイルのチュートリアルという医

学教育方法を導入しております。これまでの日本の医学教育とは一線を画するものであるため、本当に機能するまでにはいろいろな壁があるかと思えます。しかし、これからの我が国の医学教育には必要不可欠な教育方法と確信しております。今回のハワイ大学医学部での視察の経験を生かし、今後の弘前大学医学部医学教育の発展に少しでもお力になれたら幸いです。この度は本当にありがとうございます。

平成24年度 S D 章授与式

学務委員長 若林孝一 (脳神経病理学講座 教授)



新年度が始まった平成二十四年四月五日、基礎大講義室において五年度に進級した学生に対する S D 章 (Student Doctor 章) 授与式が行われた。この授与式は加藤博之教授 (総合医学教育学講座) の発案で平成十七年度から始められ、今回で八回目となる。臨床実習 (BSL) 開始前に行われるこの授与式は、本学医学部では新年度ガイダンスの一環として定着した感があるが、全国的にみると実施している医学部は千葉大、岡山大、徳島大など数少ない。本学医学部では五年度に進級するためには、四年度までにすべての講義、演習、実習科目に合格することが必要であるが、その中に四年度後期に実施される全国共用試験 (CBT と OSCE) がある。C B T (Computer Based

Testing) では基礎医学と臨床医学に関する知識が問われ、OSCE (Objective Structured Clinical Examination) では診療技能が試される。したがって、S D 章は臨床実習生の身分証であると同時に、臨床実習を開始するために必要な知識と診療技能を身に付けた証明でもある。

授与式では五年度学生全員が BSL そのまの白衣姿で臨んだ。初めに中路重之医学部長と学務委員長の挨拶があり、次いで福田眞作副病院長の訓辞の後、五年度学生代表の工藤彰治君に副病院長から S D 章が授与された。式には学生が OSCE でお世話になった模擬患者の方々や附属病院関係者も参加され、S D 章を授与される学生たちが温かく見守ってくださる姿が印象的であった。最後に工藤君が次の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓した。

1. 私は、人類への奉仕に
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。
3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。
4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。
5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死

6. 私は、私を教え導く人々に尊敬と感謝の念を捧げます。
 7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。
- これからの誓いは臨床実習のみでなく、卒業後も医師として生涯遵守すべきものである。

S D 章授与式の目的を理解し、五年度から始まる臨床実習に真摯に取り組んでほしいと思う。

昨年、東日本大震災の直後であり、弘前大学の卒業式は全学部で中止された。医学部ではコミュニケーションセンターで学位記伝達式と謝恩会をノンアルコールで行ったことを思い出す。それから一年が経過した。今回、卒業を迎え、社会人 (研修医) という新たな人生のスタート台に立つ卒業生にとって、学位記伝達式の厳粛な雰囲気と謝恩会の華やかな時間は一生の思い出となることであろう。

平成 23 年度 医学科学位記伝達式

学務委員長 若林孝一 (脳神経病理学講座 教授)



平成二十四年三月二十三日午後三時三十分から、基礎大講義室において、平成二十三年学位記 (医学士) 伝達式が、佐藤敬学長、石戸谷折一鵬校友会前理事長ご列席のもと行われた。今回、医学部医学科の卒業生は九十七名であり、この中の十九名は制度開始後六回目となる三年度学士編入学生であった。多くの学生が勉学の苦勞を乗り越え、さらには国試合格の直後でもあり、会場内は笑みがこぼれていた。

式では中路重之医学部長が卒業生一人一人と固い握手をかわしながら、学位記の伝達を行った。会場を埋め尽くした卒業生に加えて、ご来賓の方々や教員も新たな門出の喜びを卒業生達と共有していた。伝達式の後半では、中路医学部長からご挨拶があり、医師は感謝される一方で厳しい目で見られていること、また、健康でいることの重要性を話された。石戸谷鵬校友会前理事長からは、いつものユーモアを交えた同窓会のご紹介があった。会場には見事な花が添えられ、男子卒業生の凛々しいスーツ姿、女子卒業生の華麗な袴姿、着物姿も加わり、厳粛な中にも華やかな雰囲気のもと、式は終了した。学位記伝達式と同日の午後六時三十分からホテルニューキャッスルにおいて、医学部医学科第五十八回卒業記念謝恩会が開催された。ご多忙の中、佐藤学長も出席いただいた。最初に卒業生と学長、病院長、教授が一堂に会する集合写真

後においても尊重します。

余興は卒業生による三味線演奏、ピアノ演奏、パワーポイントを用いての学生生活の思い出などであり、三月末で任期満了となる花田勝美病院長からは手品の披露もあった。ワイン獲得をかけた学長とのジャンケン大会もあり、時間がたつのを忘れるほど楽しい雰囲気であった。最後に卒業生全員で「仰げば尊し」を斉唱し、謝恩会はお開きとなった。

平成23年度 ベスト研修医賞選考会

卒後臨床研修センター長 加藤 博之
(総合医学教育学講座 教授)

平成二十三年度ベスト研修医賞選考会が平成二十四年二月二十一日十八時より、医学部臨床小講義室で開催された。ベスト研修医賞は平成十六年度から始まった卒後臨床研修必修化に合わせて本学に創設された賞であり、今回で八回目を迎える。当日は、あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医に選ばれた、鴨井舞衣先生(二年次)、中田有紀先生(二年次)、根津仁子先生(二年次)(五十音順)の三名の研修医が、「ここがポイント! 研修医の心がけ」と題し、自分が研修生活の中で重視してきた事柄について、一人十分間ずつスピーチを行った。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君(特にこの一年間臨床



ベスト研修医賞選考会で研修医の発表に聞き入る参加者たち。

症例レポートを最も頑張った書き上げた工藤周平先生に「レポート大賞」、この一年間の研修医向け各種セミナーの出席率が最高であった豊岡広康先生に「セミナー賞」が贈られた。さらに事務方からも、研修関係の事務手続きに今年最も迅速かつ正確に協力してくれた藤田有紀先生に、感謝の意を込めて「グッドレスポンス賞」が贈られた。つづいて懇親会に行



ベスト研修医賞の投票を行う学生諸君。

花田前病院長よりベスト研修医賞を贈呈される根津仁子先生。



花田前病院長よりベスト研修医賞を贈呈される鴨井舞衣先生。



ベスト研修医に贈呈されたメダル(純銀製)。

われたが、五年生から、恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われた。会場は大いに盛り上がった。教職員も多数の参加があり、教職員、研修医、学生がみな、この一年の研修や臨床実習の思い出について心ゆくまで語り合い、会は盛会裏に終了した。



花田前病院長、中路医学研究科長と共に、ベスト研修医賞の根津仁子先生(中央)と鴨井舞衣先生(同右)、優秀研修医賞の中田有紀先生(同左)。

分子生体防御学講座は平成十七年四月一日付けで設置された医学部附属高度先進医学研究センターの研究部門として始まり、私は教授として平成十八年一月十



Frontier of Brain Research
— Crossroads of metabolic

研究室紹介

分子生体防御学講座

分子生体防御学講座 教授 伊東 健

分子生体防御学講座は平成十七年四月一日付けで設置された医学部附属高度先進医学研究センターの研究部門として始まり、私は教授として平成十八年一月十

害に果たす役割を深く掘り下げて研究したいと思い、研究を始めました。これまでにいくつかの成果を挙げることができましたが、まだまだこれからです。ようやく「NF- κ B」による神経栄養因子NGFの発現制御などのいくつかの芽が出てきましたので、これからしっかりとした果実としていきたいと思っています。この間、進むべき道に大きく影響を受けた事としては平成二十一年三月に開催した第十一回目の弘前国際医学フォーラム(「Emerging frontier of Brain Research — Crossroads of metabolic

regulation, stress response and disease」と題して開催しました)があります。この頃からストレス応答機構と代謝制御機構のクロストークを深く掘り下げてみたいと思いいまに至っています。また、平成二十年度から今年度まで、文科省新学術領域研究赤池班「活性酸素のシグナル伝達機構」に加えていただき、これまでにはない経験・勉強をさせていただいております。研究室のほうは平成二十三年度に二人の大学院生が入ってくれて、少しずつ活気が出てきましたが、研究室を立ち上げることの難しさを感じました。これからは、若輩ものの私を辛抱強く処していただいた諸先輩方のご恩に報いるためにも研究室一同さらなる精進を続けていきたいと思っております。最後にになりましたが、未熟な私とともに頑張ってくれている教員および大学院生の方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

人事異動

● 大学院医学研究科

採用 (24・3・1)	病理生命科学講座 助教
助教 (テニユアトラック教員)	呉 雲燕
二階堂義和	消化器血液内科学講座 助教
定年 (24・3・31)	太田 健
病態薬理学講座 教授	(国立病院機構 弘前病院)
元村 成	消化器血液内科学講座 助教
内分泌代謝内科学講座 教授	珍田 大輔 (むつ総合病院)
須田 俊宏	循環呼吸器臓内科学講座 助教
神経精神医学講座 教授	越前 崇 (むつ総合病院)
兼子 直	整形外科科学講座 助教
医学医療情報学講座 教授	大鹿 周佐
羽田 隆吉	(国立がん研究センター 中央病院)
辞職 (24・3・31)	皮膚科学講座 助教
病理生命科学講座 助教	六戸 大樹
佐藤 冬樹	(青森県立中央病院)
(ノースカロライナ大学留学)	助教 (テニユアトラック教員)
感染症生体防御学講座 准教授	飛澤 悠葵
胡 東良 (北里大学)	社会医学講座 助手
消化器血液内科学講座 准教授	大久保礼由
坂本 十一 (弘前市立病院)	消化器血液内科学講座 助手
消化器血液内科学講座 助教	立田 哲也 (医員)
間山 恒	麻酔科学講座 助手
(国立病院機構 弘前病院)	中井希紫子 (西北中央病院)
消化器血液内科学講座 助教	地域医療学講座 助手
循環呼吸器臓内科学講座 助教	工藤 孝志 (医員)
山田 雅大 (西北中央病院)	昇任 (24・4・1)
胸部心臓血管外科学講座 助教	法医学講座 准教授
消化器外科学講座 准教授	阪本奈美子
小田桐弘毅	(法医学講座 助教)
(国立病院機構 弘前病院)	消化器血液内科学講座 准教授
皮膚科学講座 助教	下山 克
是川あゆ美	(消化器内科血液内科膠原病内科 講師)
(青森県立中央病院)	消化器外科学講座 講師
泌尿器科学講座 助教	川崎 仁司
工藤 茂将	(消化器外科学講座 講師)
(工藤泌尿器科医院)	地域医療学講座 講師
眼科学講座 助教	花畑 憲洋
伊藤 忠	(地域医療学講座 助教)
(大館市立総合病院)	地域健康増進学講座 助教
麻酔科学講座 助教	岩根かほり
遠瀬 龍二	(社会医学講座 助手)
(国民健康保険 黒石病院)	配置換 (24・4・1)
地域医療学講座 助教	消化器外科学講座 講師
森山 貴子 (青森市民病院)	豊木 嘉一
地域医療学講座 助手	(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 講師)
盛 泰子	胸部心臓血管外科学講座 助教
採用 (24・4・1)	渡辺 健一
生体構造医科学講座 教授	(呼吸器外科 心臓血管外科 助教)
下田 浩	地域医療学講座 助教
(大分県立看護科学大学)	柳町 幸

糖鎖工学講座 助手	黒田 喜幸
(糖鎖医学講座 助手)	配置換 (24・4・6)
泌尿器科学講座 助教	今井 篤
(泌尿器科 助教)	採用 (24・5・1)
循環呼吸器臓内科学講座 助教	藤井 裕子
(トロント大学リサーチフェロー)	任期満了 (24・3・31)
● 附属病院	病院長
花田 勝美	辞職 (24・3・31)
(青森中央学院大学)	光学医療診療部 准教授
石黒 陽	(国立病院機構 弘前病院)
小児外科 講師	梅原 実 (鳴海病院)
神経科精神科 助教	藤井 学 (西北中央病院)
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	石澤 義也
(青森県立中央病院)	消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教
宮本 慶一	(三沢市立三沢病院)
循環器内科 呼吸器内科 腎臓内科 助教	榎引 基 (西北中央病院)
高度救命救急センター 助教	江濱 由松 (市立函館病院)
キャリアパス支援センター 助教	藤田 雄
(国立療養所 松丘保養園)	麻酔科 助手
和田 盛人 (西北中央病院)	脳神経外科 助手
佐藤 純子	(労働者健康福祉機構 青森労災病院)
小児科 助手	加村 梓
(津軽保健生活協同組合 健生病院)	周産母子センター 助手
千葉 奈歩 (西北中央病院)	採用 (24・4・1)
光学医療診療部 准教授	三上 達也 (弘前市立病院)
眼科 講師	目時 友美
(大館市立総合病院)	松木 恒太 (青森市民病院)

消化器内科 血液内科 膠原病内科 助教	平賀 寛人 (弘前市立病院)
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	神 寛之 (青森市民病院)
循環器内科 呼吸器内科 腎臓内科 助教	横山 公章
(大館市立総合病院)	眼科 助教
尾崎 拓	耳鼻咽喉科 助教
武田 育子	(青森県立中央病院)
検査部 助教	山下 真紀 (青森市民病院)
周産母子センター 助教	西村 顕正
(山形県立中央病院)	高度救命救急センター 助教
花田 賢二	(大館市立総合病院)
高度救命救急センター 助教	中井 款
(国立療養所 松丘保養園)	高度救命救急センター 助教
木村 昭利	(青森県立中央病院)
キャリアパス支援センター 助教	村上 礼一
(カリフォルニア大学サンフランシスコ校)	呼吸器外科 心臓血管外科 助手
野村 亜南 (医員)	脳神経外科 助手
熊谷 紀史	(国民健康保険 黒石病院)
神経科精神科 助手	橋本浩二郎
(大館市立総合病院)	小児科 助手
三浦 文武	(国立病院機構 弘前病院)
集中治療部 助手	西村 雅之 (医員)
周産母子センター 助手	嶋田 淳 (青森市民病院)
昇任 (24・4・1)	消化器内科 血液内科 膠原病内科 講師
佐藤 研	(消化器内科 血液内科 膠原病内科 助教)
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 講師	和嶋 直紀
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	配置換 (24・4・1)
病院長	藤 哲

消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	木村 憲史
(高度救命救急センター 助教)	諸橋 一
(高度救命救急センター 助教)	西 隆
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	(周産母子センター 助教)
小児外科 助教	小山 基
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	脳神経外科 助教
工藤香名江	(高度救命救急センター 助教)

消化器内科 血液内科 膠原病内科 助手	澤田 直也
(高度救命救急センター 助手)	昇任 (24・5・1)
小児外科 講師	小山 基
産科婦人科 助教	福山 麻美
(産科婦人科 助手)	

消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	木村 憲史
(高度救命救急センター 助教)	諸橋 一
(高度救命救急センター 助教)	西 隆
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	(周産母子センター 助教)
小児外科 助教	小山 基
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	脳神経外科 助教
工藤香名江	(高度救命救急センター 助教)

消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	木村 憲史
(高度救命救急センター 助教)	諸橋 一
(高度救命救急センター 助教)	西 隆
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	(周産母子センター 助教)
小児外科 助教	小山 基
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	脳神経外科 助教
工藤香名江	(高度救命救急センター 助教)

消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	木村 憲史
(高度救命救急センター 助教)	諸橋 一
(高度救命救急センター 助教)	西 隆
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	(周産母子センター 助教)
小児外科 助教	小山 基
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	脳神経外科 助教
工藤香名江	(高度救命救急センター 助教)

消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	木村 憲史
(高度救命救急センター 助教)	諸橋 一
(高度救命救急センター 助教)	西 隆
消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教	(周産母子センター 助教)
小児外科 助教	小山 基
(消化器外科 乳腺外科 甲状腺外科 助教)	脳神経外科 助教
工藤香名江	(高度救命救急センター 助教)

診療教授等新規称号付与者

鈴木 幸彦 (眼科学講座准教授)

平成二十四年三月一日〜平成二十七年二月二十八日

佐藤 哲観 (麻酔科講師)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

臨床教授

小田桐弘毅 (独立行政法人国立病院機構弘前病院外科部長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

鈴木 克治 (青森県立中央病院メンタルヘルス科・緩和医療科部長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

坂本 十一 (弘前市立病院内科科長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

石黒 陽 (独立行政法人国立病院機構弘前病院消化器血液内科部長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

臨床准教授

宮本 慶一 (三沢市立三沢病院外科医長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

石澤 義也 (青森県立中央病院救急部副部長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

中神 卓 (大館市立総合病院精神神経科・副部長)

平成二十四年四月一日〜平成二十七年三月三十一日

編集後記

先日、桜の季節を迎えたと思ったところですが、早いもので日中は暑さを感じ、六月となり衣替えの季節となりました。この間、五月廿一日は好天にも恵まれ日本の広い範囲にわたって金環日食が観察され、素晴らしい天文現象が大きなニュースとなりました。弘前でも部分日食ながら十分な日食を観察することができました。金環日食は首都圏では百七十二年ぶり、日

弘前大学後援会のご案内

会長 石戸谷 忻一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html)を「ご覧ください」。

社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会・鶴桜医学振興会発足(任意団体)

平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可(青森県)

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようとする事業を行っております。

- 医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
- 医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
- 地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
- 医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。

会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会		
口座	青森銀行 弘前支店	普通 1087485	※ 各銀行の本支店及びみちのく銀行 大学病院前支店 普通 0198579 ゆうちょ銀行から振込む ゆうちょ銀行振替(旧 郵便振替) 02200-4-57580 場合は、手数料無料です。
	会員種別	年会費	
会費	医学部教員	1万円	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡(電話、メール)願います。
	医学部卒業生	2万円	
	賛同する個人	1万円	
	賛同する団体	10万円	

お問い合わせ TEL:0172(33)5111内線6519 E-mail:jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp